

「研究テーマ」

# 探究Ⅰ 自分社説で社会を知り、自分を探り、未来を拓く

～熟議による「キャリア教育」の推進と「言語運用能力」の向上・「科学的リテラシー」の育成～

兵庫県立三田祥雲館高等学校 教諭 宮下 巨樹

## 1 はじめに

本校は全日制による単位制普通科の高等学校として、平成14年4月に開校した。単位制とは、平たく言えば、生徒一人一人が自分の学習内容をデザインして履修科目を選択し、自分オリジナルの時間割を作り、進路実現を目指して勉強に取り組むシステムである。

単位制が本校教育活動の一つの柱だとすれば、開校当初より学校全体で取り組んでいる「探究活動」がもう一つの柱である。生徒たちが自らの興味・関心や進路希望に応じてテーマを設定し、グループ研究や個人研究を通して問題解決能力を身に付ける、本校独自の学習プログラムである。1年次では週に1時間（「探究Ⅰ」）、2年次・3年次では週に4時間を探究活動に配当して、全職員が授業を担当している。

この学習プログラムを通して、研究テーマの内容理解を深めると同時に、生涯にわたって活用できる「学び方」を学ぶことを目標としている。具体的には、新学習指導要領が発表される以前より「言語力」の重要性に着目し、「言語運用能力の向上」と「科学的リテラシーの育成」を目指している。また、この学習を通じて、自己の将来を社会との関係性の中で捉えなおし、キャリア意識を育てることに主眼を置いている。

このようなねらいをもって学習プログラムを展開している本校にとって、NIE実践指定校となったことの意義は大変大きい。活字

で書かれた情報コンテンツを活用して社会に対する認識や知識を充実させるとともに、新聞記事を、批判的・客観的に読むことを通して「言語運用能力」と「科学的リテラシー」を涵養できる教材として活用できるからだ。

以下に、取組の概要を記すとともに、今後の課題を付記して、本年度の実践報告としたい。

## 2 新聞活用のための「探究Ⅰ」目標と推進方法

「探究Ⅰ」は1年次生全員がHR単位で学習する、本校の「総合的な学習の時間」の一部である。1年次の7クラスに2名ずつ担当者を配置し、計14名の教員が授業を担当する。担当者が各クラスの様子や学習への取組の状況等を把握しながら、ある程度学習内容への裁量をもって授業づくりができるよう、下記のような指導目標およびその解説を作成し、指導観を共有している。

### 目 標

- 1 現代社会の諸課題について幅広く関心を持ち、それらの課題を自己の課題と関連付けて探究する意欲と自分なりのものの見方や考え方を育てるとともに、他者や社会・自然との関わりの中に自己を位置づけ、社会の形成に参画するという観点から、自分自身の在り方生き方を考察させる。
- 2 現代社会の諸課題を適切に理解し、それ

についての教員と生徒、生徒同士の対話や熟議を通して、多面的に物事をとらえたり、深く考察する力を涵養するとともに、それらを論理的に表現することを通して、言語運用能力と科学的リテラシーの向上を図り、優れた問題解決能力を身に付けさせる。

目標1は学習の「コンテンツ（内容知）」に関する目標である。

高等学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編によると、高校生は「自分の人生をどのように生きればよいか、生きることの意味は何かということについて思い悩む時期である。また、自分自身や自己と他者の関係、さらには広く国家や社会について強い関心を持ち、人間や社会のあるべき姿について考えを深める時期でもある。それらを模索する中で、生きる主体としての自己を確立し、自らの人生観、世界観ないし価値観など、自分なりの種々のものの見方や考え方を形成し、主体性を持って生きたいという意欲を高めていく」発達段階にある。

このような認識の下、本校では従前より、自然科学的な諸現象を含む広義の社会現象や学問的業績の一端に触れることを重視してきた。探究Ⅰにおいてもこれを継承し、社会で起こる諸課題に対する学習を進め、考え方や認識を深めることとする。これは、上記の発達段階にある高校生にとって重要な経験となる。また、この活動を通して社会の中に自己を位置づけ、自己の在り方生き方を主体的に考えさせることが期待される。

目標2は学習の「スキル（方法知）」に関する目標である。

本校の探究活動では、身に付けさせるスキ

ルを「言語運用能力」と「科学的リテラシー」に大別する。

探究活動を充実させ、学習を深化させるには論理的かつ客観的に文章を読み解いたり、記述したりすることが重要である。また、学習を進めていく過程で、教師と生徒、生徒同士が対話したり、熟議することで育つコミュニケーション力も身に付けさせるべき大切な力となる。本校ではこれらを総合して「言語運用能力」とよび、これらを総体として高めさせることを目標とする。この力を育成することは、新学習指導要領の柱ともなっており、文理を問わず諸学の基礎として重要な能力である。また、本校が開校以来取り組んでいる探究活動の成果を発展させるために欠かせない事柄となっている。

「科学的リテラシー」とは、小倉康氏（国立教育政策研究所総括研究官、JST理科教育支援センターシニアアナリスト）によると、

- ①疑問を認識し、新しい知識を獲得し、科学的な事象を説明し、科学が関連する諸問題について証拠に基づいた結論を導き出すための科学的知識とそれを活用する力
  - ②人間の知識と探究の一形態として科学的な考え方を理解する力
  - ③科学と技術がわれわれの物質的、知的、文化的環境をいかに形づくっているかを認識する力
  - ④思慮深い一市民として、科学的な考えを持ち、科学が関連する諸問題に、自ら進んでかかわる力
- と定義される。客観性の高い文章を読み解いたり、データ等を活用する中で、これらの力を養成することが重要である。また、これら

のことは内容知としても身に付けさせることが求められる。

「スキル（方法知）」は「コンテンツ（内容知）」を追究する過程でしか育たず、「コンテンツ（内容知）」は「スキル（方法知）」の熟達なくしては深まらない。双方を有機的に関連付け、相乗的に発展させることが指導上の大きなポイントとなる。

このような目標の下、最終の学習成果として、1年次生全員が自分自身の未来について論じる1000字程度の「自分社説」の執筆を目指すことにした。

この指導計画を具体的な教材にするため、担当者のうち7名による教材作成のためのプロジェクト・チーム（以下、PT）を発足させ、年間20回に及ぶ会議を行った。会議では、NIEにより提供される新聞等を担当者が読み込み、新聞記事の選定、指導方法の確定、評価の在り方等を具体的に検討した。

### 3 授業づくりの基本方針

#### (1) 「新聞記事」の位置付け

「新聞記事」は、本校独自の学びを深める中心的な教材と位置付けて活用した。つまり、「新聞を学ぶ」ではなく、「新聞で学ぶ」もしくは「新聞から学ぶ」スタンスで新聞を扱うこととした。

#### (2) 記事・テーマ選定の方針

上記(1)を達成するため、記事は難易度、分量ともに、高校1年生にとっては読み応えのあるものを選定することとした。また、自らが生きていく現実の社会が実感できるような記事を活用した。

#### (3) 熟議型授業の重視

新聞記事を個人で読み込んだ後、生徒と担当教員、もしくは生徒同士で対話や熟議、議論をする機会を多く設定した。今話題の「マイケル=サンデル教授」の手法を、少しでも取り入れようと試みたのである。具体的には、一人ではわからないことをグループで解決したり、一人一人が持つユニークな視点をクラスで共有するなど、記事の内容を深く読み込み、考察することを期待した。また、教員が発問したり、生徒の疑問にヒントを与えたりすることで、高校生だけでは到達できない思考や考察を得ることを目指した。

### 4 自分社説執筆までの道のり

#### (1) キャリア意識の醸成と適切な社会認識

生徒のキャリア意識は、社会に対する適切な認識と、その社会に自己を位置づけようとする意欲や意志の育成を基本とすると考えている。そこで、生徒自身が生きていくこれからの社会を考察できるような記事を教材として選定し、上記3の方針に基づいて授業を展開した。

#### (2) 自分社説への道のり

「自分社説の執筆」の単元は5月から9月までの5ヶ月間をかけて展開した。当初は、新聞の読み込みと熟議による現代社会への考察の深化から開始した。

6月には実際に企業で活躍される社会人（リクルート株式会社の部長職に就かれている方）からご講演をいただき、実社会の厳しさとともに、充実感や楽しさも語っていただいた。講演では同氏の高校時代のご経験も披

露され、生徒にとって大きな思考の補助線となった講演会であった。

実際の執筆は、本校独自の文章構成法を用いて執筆する方式を用い、6月末から開始した。明確な目標のある生徒、勉学への意欲の旺盛な生徒は円滑に執筆が進んだが、目標がなかなか定まらない生徒にとってはかなり負荷の大きな学習になった。

生徒から草稿が提出されるたびに担任と担当者は原稿用紙に添削の朱を入れる時間が続いた。また、どうしても具体的な内容が深まらない生徒に対して、職員室のあちらこちらで面談を実施する姿が見られた。私はその姿を「千本ノックのような」指導と形容したが、自分の未来を懸命に模索する生徒と、それに時間を惜しまず真摯に寄り添う教員の姿に、教育の原点を見る思いがした。

8月中旬には決定稿に近い原稿が提出され、いよいよ仕上げの段階に入った。高校生ながら、現代社会を深く考察し、その中に自分を位置づけて社会に貢献できる人材になろうとする姿勢が見られる、すがすがしい「自分社説」となった。

各自の作品は印刷用の原稿用紙に清書され、クラスごとの「自分社説集」が編纂され、個人個人の思いが共に学ぶ仲間と共有されるにいった。

### (3) 他の活動との相乗効果

「自分社説執筆」の時期は、生徒にとっては単位制高校ならではのカリキュラム選択の時期と重なる。端的にいえば、2・3年次で学習する科目選択（文理選択）の時期である。これは、ともすれば得意科目や興味・関心といういわば「近未来的思考（嗜好）」が重視さ

れて「文系」「理系」選択されがちである。

しかし、並行して実施される「自分社説」が「中・長期的展望」に立って自分のキャリアを探究する活動であり、両者が有機的に結びついて、一層充実した進路選択・キャリア選択ができたと考えている。

## 5 次年度以降の課題と取組

生徒たちは、様々なことを考えるための材料とその機会（時間）が与えられれば、本当に生き生きと主体的に学習に取り組むことがわかった。また、社会で起こる出来事に対して、柔軟に捉える能力や可塑性が非常に高く、それを伸ばす教育の有用性も、担当者全員が認識しているところである。そのための教材として、社会の出来事をつぶさに伝え、様々な視点を提供してくれる新聞は、効果的で適切なものであったと考えている。

このことを踏まえ、NIEとキャリア教育を有機的にさらに連関させた取組を充実させたい。つまり、社会を客観的に考察することはもとより、社会を形成する者として、社会の中に自己を位置付けて在り方生き方を考え、主体的に社会に参画する態度を育成できるようなプログラムを一層発展させようと計画している。



自分社説を執筆する生徒



熟読を通して考察を深める生徒